

申請者:溝上 達也

論文題目 資金会計論研究
—英国から見たわが国キャッシュ・フロー計算書の評価—

審査員 安藤英義
村田和彦
万代勝信

わが国の企業会計にキャッシュ・フロー計算書の制度が導入されて数年経つが、その導入理由は一言でいえば会計基準を国際化することにあった。しかるに、国際的なこの制度の理論的背景には資金会計論があり、しかも今日の制度から見てその本家は、本論文が正面から取り上げた英国の資金会計論である。本論文の評価すべき特徴の第一は、英国資金会計論に関するわが国で初めての体系的な研究であることである。わが国における資金会計論のこれまでの研究は、ドイツの運動貸借対照表論および米国の資金会計論を中心としたものであった。

第二は、キャッシュ・フロー計算書の世界的様式における主要表示区分である「営業活動によるキャッシュ・フロー」に着目し、そこでいう営業活動の基にあるべき純粋な営業概念のルーツが英国にあることを明らかにしたことである。そこから、英国以外(国際基準、米国基準および日本基準)のキャッシュ・フロー計算書における営業活動区分は、他の活動(投資活動および財務活動)以外の区分という消極的な位置付けであると指摘する。

第三に、キャッシュ・フロー計算書が資金概念として現金を採っていることと営業概念との間には関係がある、という指摘を行ったことである。その関係は、単に支払手段としての現金ではなく、営業循環の基点・終点として業績評価の尺度となる現金に着目することで得られるとする。

第四に、以上の知見に基づき、わが国における資金会計論の諸学説の整理を行い、さらにわが国のキャッシュ・フロー計算書の分析評価を行ったことである。前者において営業概念志向の系譜と現金資金志向の系譜とに整理したこと、および後者においてとくに営業活動区分における「小計」に意義を認めたことは、本論文の首尾一貫性として評価できる。

本論文のとくに指摘すべき欠点としては、内容的に繰り返しが多いこと、一部の学説等の解釈にやや無理があることが挙げられる。さらに欲をいえば、内在的な理論よりも外部の情報有用性を優先する最近の世界的風潮に対して、本論文は批判を展開できたはずだが、その点で物足りない。しかしこれらの欠点や不足は、上に述べた長所を損なうものではない。

よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第4条第1項の規定に準じた取扱により一橋大学博士(商学)の学位を受けるに値するものと判断する。